

では、テトスへの手紙の 2 章を開いて下さい。Titus 2 (テトス 2 章の意味) と言えば、皆さんはもうこの教会でも御言葉暗誦のミニストリーがございますので、もうテトスの 2 章は何回も読んでいます。そこを今から皆さんと共に分かち合いながら、あらためてその Titus 2 の働きについても、その集まりについても皆さんにもいろいろと考えて頂ければと思います。『しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを話さない。』“しかし”という言葉が接続詞として冒頭についていますので、その前の前節の 1 章 16 節を見て欲しいと思います。『彼らは (これはクレテの家の教会の中に入り込んで、偽りの教えを説いていた所謂偽教師、偽預言者、また偽牧師という人たちのことです。彼らは)、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。(自称クリスチャン、自称牧師、自称伝道者と、口ではそう言いますが、行いでは否定しています。) 実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。』と。『しかし (と続くわけです。)、あなたは (テトスよ。まだ若い牧師です。ただパウロが全幅の信頼を置く若き後継者です。) 健全な教えにふさわしいことを話さない。』“教え”という言葉は“教理”というふうにも訳せます。健全な教理。それは偽教師とは全く正反対のものであります。偽教師は不健全な教理を説きますが、本物の教師は、本物の牧師は健全な教理を説きます。勿論健全な教理とは、聖書の言葉に沿った聖書的な教えということです。聖書から逸脱していない、健全な教理ということであります。

で、この健全な教理というものが、必ず健全な生活、ライフスタイルを生み出すということ、この後 2 節以降を見て頂くと分かります。ギリシャ語の本文ですと、この『健全な教理』というのが、『健全な教え』がこの後 2 節以降に述べられているというふうにも捉えることも出来ますし、また同時に健全な教理によって次のようなライフスタイルが実となって目に見える形で現れてくる。副産物のようにして現れてくる。両方にも捉えることが出来ます。二通りの解釈が出来るわけです。2 節以降は、これが健全な教理の内容となっていると。そのようにも捉えることも出来ます。健全な教理とは、深遠な神学で普通の人には、一般人にはとても理解が難しいというようなものではなくて、むしろすべての人に理解されて、そして生活に実に密着している具体的な生活の指針となるような実践的な内容であると。それが健全な教えなんです。逆に不健全な教えは、一部の人にしか理解出来ない、庶民にはとても理解しがたい。そのようなものは不健全であります。聖書の教えは子供でも理解出来るものです。

そしてもう一通りの考え方として、理解の解釈の仕方としまして、1 章の内容の中で健全な教理、それについて教えられていたわけですので、それらの健全な教えが今度は私たちの生活に適用されて、そして健全なライフスタイルを生み出すのだと。それが 2 節以降、老人たちにも、年をとった婦人たちにも、また若い婦人たちにも、そして若者たちにも素晴らしい効果を、この健全な教理がもたらすのだと、そのようにも捉えることが出来ます。で、私は両方に捉えて良いかと思います。なぜならば、それは両方とも真理であるからです。健全な教理は確かにすべての世代に、老若男女に対して適用されて、実践が必ず伴う、誰にでも取り組める内容であります。で、同時に健全な教理は私たちに健全なライフスタイルをもたらすというものであります。ですから、教理を学ぶという事は非常に大事な事です。教理なんて言われたら、ちょっと引いてしまいますと。神学だとか、ちょっと私には分かりませんと。苦手ですとか、興味がありませんと、そのように敬遠してしまうのではなくて、健全な教理は健全な生活、ライフスタイルを生み出すということを知って欲しいと思います。学べば学ぶほどあなたの生活は変わるんです。あなた自身も勿論変わります。不健全な人間は、健全な人間へと変えられます。人格においても、生活においてもです。

で、早速 2 節以降を見ていきたいと思ひます。『老人たちには、自制し、謹厳で、慎み深くし、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。』“老人たち”、「年を重ねた人たち」というのがそこでの直訳ですけども、その老人たちには自制するやうにと。老人は真っ先に自制するやうにと。ここで“自制”という言葉は「適度に」というふうにも訳されます。「年甲斐もなく」という言葉もありますけれども、「適度に。年相応に。」“謹厳で”これは「落ち着いた、真面目な」というふうにも訳せる言葉ですが、次に続く“慎み深くする”という言葉が「自制」とも似ているんですけども、こちらの方がどちらかといえばセルフ・コントロールという意味合いで使われています。“自制”という言葉もセルフ・コントロールという言葉とは非常に似通っていて同義的に使われているんですけども、最初の方は「適度に」。“謹厳”それは落ち着いた真面目に。で、“慎み深く”という言葉が「自制」というふうにも訳した方が適訳だと思ひます。英語で言えば、それがセルフ・コントロール(self control)という言葉です。ひとつひとつ似たり寄ったりという言葉ですけども、それが老人にむしろ欠けている要素と見て欲しいと思ひます。とりわけこのクレテの老人たちは、自制にも、謹厳にも、慎み深さにも欠けていて、それらをあらためて教えられる必要があったということです。

で、『信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。』パウロはコリントの手紙第一の 13 章では『いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。』と述べましたけれども、ここでは『信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。』と。“希望”という言葉が、むしろここでは“忍耐”というふうにも置き換えられております。キリスト教の 3 大徳目と言われるのが、信仰・希望・愛の「信望愛」でありますけれども、ここでは「信仰と愛と忍耐」と敢えて“忍耐”という言葉で“希望”の代わりに使っております。特に老人たちには、忍耐が必要であるということです。キレやすいんです。ですから老人たちは、自制して適度に無理をしないやうに、年相応にふさわしく。で、同時に謹厳で（落ち着いた真面目であるということ。）、そして自分自身を制する。慎み深くというのがセルフ・コントロールであります。ますますもって信仰において深みを求め、愛においても深みを求め、そして忍耐においても深みを求めるやうに、忍耐深くあるやうにと。輪を掛けて信仰と愛と忍耐においては成長するやうに、消極面と積極面、両方述べております。

で、3 節『同じやうに、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるやうに。』特にこの 2 節 3 節はここにいる皆さんの大多数に適用されるのではないかと思ひますが、“年をとった婦人たち”。“年をとった”という言葉が引かかる人がいるかもしれませんけれども、決して若くない、10 代 20 代というやうな女性ではなくて、もうある程度熟練した、社会生活もある程度経験しているそのような婦人たちのことです。『神に仕えている者らしく敬虔にふるまい』すべての年をとった婦人たちは、女性クリスチャンたちは、例外なく神に仕える者でなければいけません。大前提は、もうすべての年をとっている婦人たちは神に仕える者でなければならぬと。で、その神に仕えている者らしく敬虔にふるまい。次に『悪口を言わず』ときてはありますが、この『悪口を言わず』“わるぐち”というふうにも読めるわけですけども、女性は男性と比べますとどちらかというとおしゃべりであります。皆さんは否定しないと思ひます。ある人は「女性は男性の 3 倍も話す。」と、最近のいろいろな統計も出てはいますが、ただそのようなことを改めて統計で調べなくても、女性の方がやはり男性よりもおしゃべりであって、そしておしゃべりであるということは、口において舌において罪を犯しやすい。言葉によって罪を犯すという傾向がある事は、これも否めないことであろうかと思ひます。で、この『悪口を言う』というギリシャ語は“ディアボロス”と言ひます。“ディアボロス”というのは英語にもなっていて、それは実はサタンのことと指します。「サタン」“ディアボロス”は「悪口を言う者、中傷する者、非難する者」それがサタンの名前でもあります。ですからこの

『悪口を言う』のはまさにサタンの行為、サタンの罪として忌み嫌うべきものです。しかしこの忌み嫌うべきサタンのおぞましい罪を女性の皆さんは気軽に犯してしまうかもしれません。ですから真っ先に「悪口を言ってはならない。あなたはサタンのようになってはならない。」と。気軽にちよくちよく犯してしまう罪であります。人のことを悪く言ったり、ゴシップしたり、「あの人はまたあんなことを言った。あんなことをやった。」と噂話に花を咲かせて、井戸端会議で盛り上がる。良くないことです。それは実はサタンの行為であります。

で、『大酒のとりこにならず』kichen drinkerにならず、というふうにも訳せますけれども、特にクレテの女性たちはよくお酒を飲んだということがここからも窺い知れます。男の方がどちらかという大酒のとりこになりやすいと思われると思いますが、当時のクレテの女性たちはよくお酒を飲んだということです。『とりこにならず』ですから、酒に飲まれないようにと。聖書はお酒を飲んではならないと、飲酒は禁止していません。ただし『酒に酔ってはならない。』とハッキリ禁止しています。その辺も誤解してはいけませんが、但しお酒を飲むことによって、もし兄弟に姉妹につまずきを与えるようであれば、例えば教会に来た人がアルコール依存症でもう何とかアルコールから解放されたい。酒乱であったり、お酒によって身を滅ぼしているような、家族を振り回して傷つけているような、そんな人が教会に来た時に、あなたがクリスチャンとして酒を嗜んで浴びるように飲んでいる。そういう姿に、お酒でトラブルを抱えて本当に苦しんでいる人たちはつまずくわけです。ですから、もしつまずきを与えるようであれば、お酒を飲む自由もありますけれども、それをすべて断つ、やめるという。それを愛を持って私たちは自分に課していく必要があります。つまずきを与えない。これも愛であります。自分にはお酒を飲む自由があるからと、自分の権利をただ主張して弱い人たちに配慮しない。それは、泥酔による罪は犯さないかもしれませんが、兄弟に姉妹につまずきを与えるという罪は、これは避けられないものとなってしまいます。注意したいと思います。教会では私たちは自分のことだけを考えるのではなくて、弱い人たちのことを、罪で苦しんでいる人たち、何とかその罪の傾向を克服したい、乗り越えたい、勝利したい、解放されたいと、そのように願っている人たちをむしろ私たちは助けていくべきであります。寄り添って、そして励まして、慰めて、戒めていくべきであります。

で、『良いことを教える者であるように。』年をとった女性たちは、もう既に神に仕えている者でありますので、模範的に自分たちが聖書に書かれている素晴らしい教理を言葉を持って、また身を持って教えることができるようになります。出来るはずであります。で、そうしなければなりません。『良いことを教える者であるように。』「いや私はまだまだ教わったばかり。まだ教えるような立場ではありません。」一見謙遜なように聞こえるかもしれませんが、本来はもう年をとった婦人たちは良いことを教える者となっていなければなりません。『年数からすれば教師になっていなければならぬ。』という言葉もヘブル書にありますので、その辺もいつも心に留めておいて頂きたいと思います。あなたはいつまでも未熟なままのベイビー・クリスチャンではないんです。

4 節『⁴そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、⁵慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。』これこそがクリスチャン女性のミニストリー、神の働きであります。クリスチャンの女性が神に仕えるとは、具体的にはこういうことなんです。若い女性たちに良いことを教えるんです。身を持って、言葉を持って。具体的な内容として、それは『夫を愛すること』です。まず自分が夫を愛していなければ、若い女性たちに「夫を愛するように。」と説くことは出来ません。自分が実践していないことを教えるならば、それはただの偽善であります。

そして『子供を愛する』ということ。非常に多くのクリスチャンの女性たちは、特に結婚されている人

たちは、夫を愛しているかというところでは愛しておりません。わざわざ教えられなければいけないということがミソです。もうそれが当たり前であれば、夫を愛するようにとあらためてそのようなことを教えられる必要はないわけです。つまり裏を返せば、クリスチャンの女性たちは夫を愛することをしていないということです。それを教えられなければならないということです。で、子供を愛する。「当たり前じゃないですか。私は母親ですよ。何を言うんですか。」と、あなたは言うかもしれませんが、本当のところやはり子供も愛していないです。そのことも教えられなければいけません。もしかしたらあなたは「いや私は愛しているつもりです。」と。でもそれはやはり“つもり”なんです。夫を愛しているつもり。子供を愛しているつもり。本当に夫を愛するとはどういうことなのか。まことに子供を愛するとはどういうことなのか。そのことをまず自分自身が実践した上で教えなければなりません。

そして『**慎み深く**』。これは老人たちにも言われている言葉でもありました。で、『**貞潔で**（純潔で）、**家事に励み**（これは家庭的な女性であるようにというふうにも訳せます。）、**優しく**（優しくないわけです。）、**自分の夫に従順であるように**（不従順なわけです。）』最後の**5節**の結びの言葉がとても大切ですから、是非**Titus 2**のこのマラナサ・グレース・フェロシップの御言葉を暗誦するというミニストリーのグループの名前は『**Titus 2**』と言います。これは**テトスの2章**からとられておりますが、特にこの**5節**の終わりの部分『**神のことばがそしられるようなことのないためです。**』というところ。いくら神の言葉を学んで、いくら神の言葉を暗誦したところで、もしかしたら神の言葉がそしてられてしまうようなことがあるかないか、是非考えて頂きたいと思います。毎週毎週欠かさず礼拝に集い、バイブル・スタディーに参加して、いっぱい学んで、いっぱいノートに取っている。今も皆さんそうしています。でも帰ってから、夫は朝から晩まで働いております。帰ってきたら夕食の準備が出来ていない。帰ってきたら家はめっちゃめっちゃ、汚い、掃除していない。なすべき家事は全然なされていない。仕事で帰ってきて疲れた夫は、その状態を見てどう思うのでしょうか。聖書を学ぶことによって素晴らしい効果はあります。ここに書かれているように、御言葉を学ぶことで今まで以上に夫を愛し、子供を愛することが出来ます。これまでなかったほどに。でも、もしあなたが御言葉を心にまで引き下げずに、頭で留めてしまっているならば。ただ沢山聞いて、学んで、ノートにメモを取ることで満足してしまって、そのノートはほとんどと言っていいほど開かれることなく、ただ冊数だけが溜まっていく。その結果、折角御言葉が語られていても、教えられていても、あなたのライフスタイルは、あなた自身は何も変わらずに。むしろ疲れて仕事から帰ってくる夫からしたら、「そんなに聖書を学んでいるのに、一体何の効果があるのか。何もお前は変わっていないじゃないか。」もし、あなたが逆に御言葉を学ぶことで、礼拝に集うことでどんどん変わって行って、そして「今まで妻は私のことをこんなに愛してくれなかった。今までお母さんは私たちのことをこんなに愛してくれなかった。それは単にお母さんが教会に通って聖書を学んで、毎日神様と時間を過ごしているから。だからこんなにも変わったんだ。」そうなるとうちや子どもたちは、あなたと同じように聖書に興味を持ち、教会に集うことに魅力を覚えるようになります。もっとあなたに教会に集って欲しいとすら願います。なぜあなたの夫は、あなたの子供は、聖書に興味を持たないのでしょうか、バイブル・スタディーに集うということに興味を持たないのでしょうか。教会に通うということに興味を持たないのでしょうか。理由はいろいろあると思います。でも、その中の大半はおそらくはあなたが原因なのかもしれません。『**神のことばがそしられるようなことのないために**』私たちは今ここに集められております。神の言葉をいっぱい知って、いっぱい暗誦しても、神の言葉がそしられてしまうならば、何の意味もありません。「じゃあ、あなたは私たちにバイブル・スタディーに来るなど言っているんですか。」と。それも誤解しないで下さい。御言葉がもし頭ではなくて心にまでしっかりと根を下ろすならば、心に御言葉が蓄えられるのであれば。頭ではなく、心です。そうすれば、あなたは必ず変わります。今まで夫を愛さなかったという人も、夫を愛せるようになります。今まで子供を愛せなかったという人も、子供を愛せるようになります。で、ここで言われているように『**慎み深**

く』なります。『貞潔』な妻となります。そして『家事に』いよいよもって『励むように』なります。「今まで家事なんか面倒くさかった。」なんでこんな人ためにやらなきゃいけないのかと。ところが、今はあなたは喜んで家事に励み、夫の好きなご飯を作ったり、又は夫が気持ちよく疲れた体を癒せるように家も掃除したり、夫に喜ばれるような準備をしておくということ。そして「本当に優しくなった。妻は教会に通うことで、聖書を学ぶことで本当に優しくなった。そして自分の言うことをしっかりと聞いてくれる。従順となった。」と。そうなれば神の言葉は決してそしられることはありません。ですから、もう一度言いますけれども、なぜあなたの夫が、あなたの子供が、あなたの家族が、聖書に興味を持たないのか。それはあなたが原因なのかもしれない。そのことを知って欲しいと思います。

次に6節『同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。』若い人に、思慮深くあるように。若い人はあまり考えません。ですから、思慮深くあるように。勧めなさいということですから、皆さんが勧めたいと思います。もっと思慮深くあるようにと、常々若い人たちに。自分の子供にも、若い者たちにも思慮深くあるように。後先考えなかったり、本当に何も考えていないというふうな若者が多いわけですので、是非他の人のこともちゃんと思いやって気遣って、周囲のことも目を留められるように、気遣いが出来るように勧めなさい。

で、7節に『また、すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては（教理においては）純正で、威厳を保ち、⁸非難すべきところのない、健全なことばを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。』大切な言葉が7節にあります。それは『模範』という言葉です。私たちが何かをしている時、それは必ず模範を持って教えなければいけません。それがイエス・キリストのティーチング・スタイルであります。イエスは常に口先だけではなく、自分自身が実践することで、模範を示すことで教えられました。人に仕えるとはこういうことだと言って、イエスは弟子たちの汚い足を洗われました。お互いに足を洗い合うべきである、仕え合うべきであるということ自ら率先して実践して模範を残すことで教えられました。親が子供を教える時もそうです。口先だけで教えるのではなくて、親が模範を示すことで子供に、又は孫に教えるわけです。教会においても同じです。牧師やリーダー、皆さんのような年取った婦人たちは、若い婦人たちに対して、子供たちに対して、若者たちに対して、模範を持って教えるということです。

第一テモテ 4:12 にも『模範』という言葉が使われております。『年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。』テモテは、テトスと並んでやはりパウロの片腕のような忠実な後継者でありました。若いエペソの教会の牧師です。同じようにあなたも模範を示しなさい。模範によって教えるように。この『模範』という言葉は、ギリシャ語では「テュポス」"tu^hpos"と言います。「テュポス」というのは英語の「タイプ」"type"の語源であります。ですから、「模型、型、雛形^{ひながた}」というふうにも訳せます。あなたが模型を示すように。あなたが雛形を示すように。「自分のように生活すれば、それが健全な教理に基づいた神に喜ばれる歩みなのだ。」ということ自ら見せるわけです、示すわけです。で、この「テュポス」という言葉がギリシャ語訳に訳されている旧約聖書では、幕屋を作る際に度々使われている言葉でもあります。旧約聖書は勿論本来はヘブル語で書かれているんですが、それをギリシャ語に訳した聖書の中で、特に出エジプト記の25章に、幕屋を作る際の細かい規定がモーセによってまとめられております。その出エジプト記の25章そこに「主は型に従って（英語で言えば）パターンに従って、この幕屋を作るように。」と。ヘブル書にもこの幕屋のことが、型に従って作られるということ、何度も何度も述べられております。

ヨハネの福音書 1:14 では『ことばは人となって（肉をとられて）、私たちの間に住まわれた。』そこは

文字通り訳しますと、「ことばは人となって、そして私たちの間に幕屋を張られた。」イエス・キリストがこの世に来られた様を言い表しているんですけども、言葉は勿論ロゴスです。神の言葉は肉をとって、受肉されて、そしてイエス・キリストとしてこの世に来られたんですが、その際にイエスは幕屋を張られたというふうに、本来は直訳するとそのように書かれているんです。つまり、イエス・キリストが私たちに生活規範というものを、又は行動パターンというものを自らの身をもって示されたということです。言葉が肉をとって、文字通りイエス・キリストは私たちの模範として私たちの間に住まわれたんです。幕屋は神の示すパターンに従って作られたように、イエス・キリストの歩みも神の示されたパターンに従って歩まれたもの。神の御心を行うためにイエス・キリストはこの世に来られたわけです。イエスを見れば、私たちは神の子どもとしてどのように振る舞うべきなのか、一目瞭然なわけです。非常に分かりやすいわけです。イエスこそが私たちの模範です。究極のパターンです。イエスを見れば私たちは、健全な教理に従って歩むとはどういうことか、すぐ分かります。

WWJD という言葉を皆さん聞いていると思います。What would Jesus do? イエスならどうするか。この時にイエスならどうするか。神様の御心とは一体何でしょう。イエスならどうするか。この時イエスならどう言うか。どう判断するか。どちらを選ぶのか。WWJD です。そのイエス・キリストが私たちの究極の模範ですから、そのイエスに倣って歩む中で、同時にその姿を若い人たちが見て、あなたを通しても彼らは学んでいくことが出来るわけです。パウロは「私がキリストに倣っているように、あなた方も私に倣いなさい。」と。「私を見なさい。私はイエス・キリストに倣った生き方をしているから、私を見なさい。」私たちの多くは言い訳じみたことを言います。「私は不完全です。だから私を見てはいけません。私を見ればつまずきますから。私は弱いからです。罪人ですから。私を見るとあなたはショックを受けます。幻滅するでしょう。だから私を見ないで欲しい。」とか。勿論それは間違いではありません。ただし、それを言い訳にしてはいけません。むしろパウロと同じように「私を見て欲しい。私がキリストに倣っているように、あなた方も私に見習うように。」これは自分のことを鼻にかけて自慢げに、不遜にも、傲慢にもそのように主張しているのではなくて、むしろ普段からイエス・キリストに倣って、イエス・キリストを模範とした歩みをしているので、それを見て欲しいと。私たちもそうならなければいけません。それを目標としなければいけません。ですから、「今はとても人に見られたらつまずきを与えるばかり。こんな弱い、こんな一貫性のない私の歩みは、若い人たちに全然模範になっていない。つまずきを与えるばかり。だから見てももらいたくないと。見るのはイエス・キリストにして欲しい。」と、あなたは思うかもしれませんが、いつまでもそのまま良いものではありません。必ず私たちも成長し、成熟し、パウロと同じように「私を見なさい。私を見て欲しい。一番分かりやすいでしょう。」と。親であれば絶対にこの事を言えなければいけません。子供たちに対して「私を見なさい。お父さんは、お母さんは普段からこう言っているでしょう。こうやっているでしょう。」「いや、言ってることとやってることが違います。」と子供にそんなことを言われたら、もう最低です。最悪の状態ですから、ぜひ改めて頂いて、孫たちに「私を見なさい。クリスチャンとして歩むとはこういう事なんだ。」と。まだ救いを受けたばかりのベビー・クリスチャンにも私たちはむしろ積極的に自らを持って、模範を持って教え導いていく必要があります。

で、そのような歩みをしていけば、絶対にノンクリスチャンからは指を指されるような事はありません。『私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。』と。「クリスチャンのくせに。」とか、「それでもクリスチャンか。何年教会に通っているんだ。聖書なんか読んでいたって、学んでいたって、お祈りしていたって、何の役にも立っていないじゃないか。」と敵対する人たちは、あなたに厳しい言葉を浴びせるかもしれません。で、それはほとんどの場合は正しいかもしれません。言われて言い訳が出来ないかもしれません。言い返せないかもしれません。その状態にいつまでも甘んじてはいけません。その状態にいつまでも嘆いてはいけません。私たちは模範を示すことが出来ますし、

神の言葉がそしられないように普段から注意していく必要があります。

で、今度 9 節の方には『奴隷』という言葉が使われていますけれども、これは現代で言うところの従業員みたいなものです。『⁹ 奴隷には、すべての点で自分の主人（雇い主、ボス）に従って（上司に従って）、満足を与え、口答えせず、¹⁰ 盗みをせず、努めて真実を表わすように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。』奴隷に対して、従業員に対して、すべて点で自分の雇い主、ボスに対して、上司に対して、社長に対して、従っていくように。彼らに満足を与えて、口答えをしてはいけません。ましては盗みなんかしてはいけません。会社の備品を家に持ち帰るとか、立派な盗みです。『努めて真実を表わすように勧めなさい。』正直でなければいけません。嘘をついてはいけません。クレテの教会においてこのことは大変厳しい内容となっていたと思いますし、そもそもクレテ人は、『昔からの嘘つき、悪いけどもの、怠け者の食いしん坊』と、先週見た内容を思い出して下さい。1 章 12 節に書いてありました。それがクレテ人の気質だったわけです。何も考えずに嘘をつく。自分が嘘をついているかすら、もう意識出来ないほどに。嘘で固められた人生。悪い汚れたけどもの。もう本能だけで生きているような、欲望に常に支配されているような生き方をしている。で、怠け者の食いしん坊。働きもしないで、ただ食ってばかり。贅沢をしているような人たちです。そういう人たちに対して、もしあなたがイエス・キリストを知って救われていくなれば、あなた方は変えられなければならない。いつまでも生まれ育った気質を引きずったままではならない。あなた方も『救い主である神の教えを飾るように。』この『飾る』という言葉は、ギリシャ語では「コスメオー」"kosmeo"という言葉で、「コスメティック」の語源です。女性であればコスメティックに沢山のお金と時間をかけるかもしれません。この「コスメオー」という言葉は、「最高美」という言葉です。最高に美しく、輝き出すようにする。あなたの容姿を最高に美しくするというよりも、ここでは『救い主である神の教え』を最高に美しくディスプレイするように。最高に美しく輝き出すように、あなたは努めなければならない。「聖書の言葉はこんなに素晴らしいんですね。」と、「あなたを見ていて分かりました。」上司があなたにそう言ってくれるように。

で、11 節に『**というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、**』ここからは、神の恵みが教えることが列記されています。これもまた神の教えだとか、健全な教えとなっているものです。その**神の恵みが現われ**（律法ではありません。神の恵みが現われ）、で 12 節以降具体的に恵みが教えることとして 5 項目挙げられております。

12 節に。第 1 番目の項目として『**不敬虔とこの世の欲とを捨てる。**』神の恵み、それは不敬虔とこの世の欲とを捨てるようにと教えます。

で、第 2 番目に『**この時代にあって、慎み深く**』何回もこの『**慎み深く**』という言葉が出てきています。キーワードとなっています。これも恵みが教えることです。

で、第 3 番目に『**正しく**』

第 4 番目に『**敬虔に生活し**』

そして第 5 番目、13 節に『**祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを**（この現われというのは、キリストの現われということで、具体的には携挙のことです。後でまた詳しく学びますけれども、その携挙を）待ち望むようにと教えさとしたからです。』

神の恵みがこの 5 つのことを教えます。**不敬虔とこの世の欲とを捨てるように。慎み深くあるように。正しくあるように。敬虔に生活するように。そして携挙を待ち望むようにと。**この 5 つを神の恵みは教えます。律法ではありません。神の恵みが教えるんです。健全な聖書の教えが、このことを説くわけです。

逆に言えば、不健全な教え、恵みではない律法が教える事は、これとは真逆のことを教えると見て欲し

いと思います。不敬虔に生きるように。この世の欲を捨てるどころか、ますますこの世の欲を持ってこの世で繁栄し、この世で成功し、この世で快樂を思う存分味わうように。慎み深く適度になんか良くない。思うままに、願うままに、欲するままに。正しく、正直者はバカを見る。そんな正しいなんて損するだけ。敬虔に生活する。文字通りは「神のように生活する。」です。ですから不敬虔に生活するとは、まさに神に背を向けた歩みということです。携挙を待ち望む。「そんな馬鹿らしい、そんな荒唐無稽な話、あなた本気で信じているんですか。馬鹿らしい。狂信的だ。」そのように説くのは、神の恵みではありません。そのように説くのは、健全な教えではありません。すべては、恵みとは全く相反する律法の教え、人間の教え、そしてそれは不健全な教理であります。その対比も是非皆さんの心に留めておいて欲しいと思います。

それにしましても、私たちもこれらを教えられながらも、あまりの倫理基準の高さに、あまりのハードルの高さに、神のスタンダードを高さに圧倒されてしまって、「私はとてもじゃないけれども、このように今出来ていない。生活出来ていない。全く自分は実践出来ていない。」と。不敬虔とこの世の欲とを捨てて。この時代になって、特に今は世の終わりですから、パウロは「終わりの時代は困難な時代である。」と**第二テモテ 3 章**でも言われております。ですから、ここで私たちは難しい時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活する。「これは本当に大変なことです。」と、「いや、私にはもう無理です。」と言う人もいるかもしれません。どうやったらこのような生活が私たちにも営めるのでしょうか。鍵は、特にこの**13 節**の終わりの部分です。これは恵みが教える第 5 番目の教えと言うべきものですが、『祝福された望み』祝福された希望、ただの希望ではありません。これは祝福された特別な希望です。『すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエス』イエス・キリストは大いなる神です。ハッキリと「イエスは神だ。」と言っています。エホバの証人は「イエスは神ではない。神に造られた被造物、御使いである。」と言いますが、イエスは神です。しかも大いなる神です。

で、『**栄光ある現われ**』これが携挙のことだと言いました。この携挙を待ち望むように。実はこの第 5 番目の恵みの教えとして挙げられている、この携挙を待ち望むことによって、実はその前のすべての 4 つを私たちは自ずと実践出来るんです。どうやったら、一言で言えば、理想的な、敬虔な、聖いクリスチャン生活を私たちは送ることが出来るのでしょうか。その鍵は、その答えは、携挙を待ち望むことによってと。それが答えです。

第一ヨハネ 3：2～3を参照して頂きたいと思います。『**愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら**（キリストが現れたなら。これは携挙のことです。携挙というのは私たちを、神の教会を、キリストの花嫁を、神の子供たちを地上から引き上げて、そして雲の中で主と顔と顔を合わせるその瞬間私たちは、朽ちることのない体、栄光の体、キリストが復活された後のあの体と同じ体を頂いて、キリストと同じ姿に変えられる。一瞬にしてその事が経験されます。それが携挙なんです、その後天に上げられて、キリストと晴れて結ばれた上で、7年間の子羊の婚宴という結婚披露宴のパーティーに与ります。**黙示録の 19 章**にその“子羊の婚宴”という言葉が使われております。そのキリストが現れたなら、携挙が起こったならば）、**私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。**（次の**3 節**に注目して下さい。）**3**キリストに対するこの望みを（この希望を。すなわち携挙の希望を、祝福された希望を）**いなく者はみな**（携挙を待ち望む者は皆）、**キリストが清くあられるように、自分を清くします。**』携挙を待ち望む者は、キリストが清くあるように自分を清くする。キリストのように変えられると。キリストのような歩みを自ずとするようになります。これは真理です。もし仮にイエス・キリストが、今日あなたを携挙される、迎えに来られる、携え上げるということになった時に、今日あなたは 1 日の言動を注意深くすると思います。今日が地上の最後の日です。イエス・キリストが今日あなたを迎えに来るんです。昨日とは全く違う振る舞いをするようになりますと思います。昨日も携挙があると本当に信じ

て歩んだのであれば何も変わらないと思うんですけども、すっかりイエス・キリストが迎えに来られるなんていうことはもう頭の中から抜け落ちていた。今日やることでもう頭がスケジュールでいっぱいである。あれもしなきゃいけない、これもしなきゃいけない、ノルマがある。こういう問題もある、あーいう問題もある。このこともやりたい、あのこともやりたい。いろんなことをあなたは思っている中で、イエス・キリストが今日戻って来られますように。多くの方は慌てて「あっ、こんなことじゃいけない。」と。「もう自分のことしか考えていなかったから、もうイエス・キリストが迎えに来られるのであれば、もう一切キャンセルして、もうイエスがいつ迎えに来て良いように、もう全て準備しておかなきゃいけない。」身の回りの整理をして、部屋も片付けた後で、自分が実際にイエス・キリストが迎えに来られた後、本当に証しになっていなかったということであれば、まだ福音を宣べ伝えていなかったということであれば、一人一人に最後の時間出来る限り福音を宣べ伝えて、そして謝るべき人には謝って、そして棚上げにしていた問題もなるべく残されている時間の中で全て処理した上で、神との関係をしっかり正して健全なものにした上で、イエス・キリストが来られるのを待つというふうにあなたは生活を整えると思います。すべての言動もライフスタイルも一瞬にして変わると思います。今朝、夫にあんな口汚いことを言ってしまった。もう即あなたは今電話して「ごめんなさい。」と。子どもにあんな冷たい態度をとってしまった。無視したんだと。上司に対して、部下に対して、あんな心ないことを、あんな腹立たしいことを。友達をあんなに無下に裏切ったり、見捨てたり。イエスが今日戻って来られるならば、あなたは一つ一つを正そうと最大の努力をしたいと思います。

そのようにイエス・キリストがいつ戻ってきて良いようにと待ち望んでいる者たちは、自ずと生活を変えます。自ずと不敬虔とこの世の欲を捨て、自ずと慎み深くなり、「こんな贅沢している場合じゃない。本当にこんなもの必要なのか。こんなにお金をかけて、こんなに時間をかけて、こんなくだらないこんな娯楽のために、こんな快楽のために、こんなおもちゃのために、一体自分は何をやっていたのか。どんなに膨大な時間を浪費していたのか。」と、不敬虔な生活を改めます。

マタイの福音書 24: 44~51 も参照して頂きたいと思います。『⁴⁴だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。(これが携挙の教えです。人の子は思いがけない時に来る。だから携挙を待ち望むの者は、皆目を覚まして用心していなければいけません。)⁴⁵主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいどれでしょう。⁴⁶主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。⁴⁷まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。⁴⁸ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い(この『まだまだ帰るまい。』というところは*印が付いていて欄外には直訳として『時間がかかる』。「携挙なんかまだまだ先だ。自分が生きている間には携挙なんか無いんだ。」と。「カズはしきりに携挙があると。自分が生きている間に携挙があるなんてほざいているけども、本当かどうか分かりもしない。もっと後のことじゃないですか。」主人はまだまだ帰るまい。携挙はまだまだあるまい、もっと時間がかかるに違いない。それは悪いしもべの考えることです。)、⁴⁹その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、⁵⁰そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。⁵¹そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。』

“悪いしもべ”の“悪い”という言葉は、ギリシャ語では「カコス」"kakos"と言います。「カコス」という言葉は、「かつては良かったんですけども、今は悪くなってしまった。ダメになってしまった。」丁度果物が腐るような状態です。「以前は良かったのに、いつの間にか悪くなってしまった。」それが「カコス」というギリシャ語の言葉です。この悪いしもべは、主人が帰って来ないとは思っていません。帰って来る事は、これは認めているんです。携挙を否定はしません。でも、「携挙はすぐに起こらない。イエスは

すぐに戻って来ない。まだまだ先だ。もっと時間がかかる。10年も20年も30年も、いや100年も先の話じゃないですか。」そういう人たちは『悪いしもべ』なんです。で、『悪いしもべ』は49節にあるように『仲間を打ちたたき』ます。「携挙がすぐに起こるかもしれない。イエス・キリストはすぐにいつでも、今日かもしれない。あなたを迎えに来ます。」なんていうことを言っている人たちを馬鹿にします。「狂信的だ。気が狂っている。」文字通りたたく事はないにしても、言葉の暴力でたたくこともあるかもしれません。「馬鹿らしい。くだらない。本気でそんなこと信じているのか。」と。

そしてもう一つの特徴として『酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めている』これは文字通り勿論酒に酔ったり、ご馳走を食べて贅沢をしているというふうにも捉えることができますけれども、これもやはり象徴的な行為です。これは肉的な行為です。イエス・キリストがまだまだ来られないと思っている人たちは、霊的ではなくて、敬虔ではなくて、肉的で不敬虔な生活を自ずとするようになります、選ぶようになります。「イエスはまだまだ戻るまい。今はやることはいっぱいあるんです。」と。「教会なんか言ってる暇はありません。あれもやりたい、これもやりたい、これも買いたい、あれも買いたい。暇な時に、都合が良い時にまた教会に行きますよ。今私の大好きなテレビ番組をやっているところなんです、違う時間に。」そういう人たちは皆悪いしもべであります。で、彼らは必ず泣いて歯ぎしりするようになります。本当にこれまでに経験したこともないような後悔をするようになります。携挙の際にその人たちは必ずキリストの御座の裁きに与ります。すべてのクリスチャンは携挙の際にキリストの御座の裁きを受けます。このキリストの御座の裁きというのは、罪に定められる裁きではありません。そうではなくて、報いを算定する裁きです。罪に定める裁きは、クリスチャンはもう受けないんです。なぜならば、イエス・キリストがすべてを罪を十字架で負って下さったからです。イエスを信じない者たちは、最後に大きな白い御座の裁きというのを受けます。それが所謂最後の審判というもので、これはキリストを信じない者たち、拒否した者たちが受ける、罪に定められる裁判のことですが、私たちはそのような裁判はもう受けなくていいわけです。イエスを信じた瞬間に、義と認められて、罪のない者とみなされたからです。ですから、キリストの御座の裁きというのは、報いを算定する裁きで、『御座』というのはギリシャ語の「ピーマ」という言葉で、それはオリンピックの表彰台を指す言葉です。表彰台において私たちが地上でなしたことが評価されるわけです。そして冠を受けるわけです。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と。でも、悪いしもべは「携挙なんかまだまだないだろう。人生をもっと謳歌しなきゃいけない。教会なんか行ってる暇があれば、もっとガツガツ働いて金を稼いで、ある程度豊かになったら、ある程度余裕ができれば、その時には教会に行ってもいい。その時には真面目にクリスチャン生活を送り始めて遅くはないんじゃないか。」と、いろいろこの世のことにかかりきりになって、人生を無駄にしてしまう。沢山のお金も、労力も、時間も浪費してしまう。キリストの栄光のために用いるよりも、自分の榮譽のため、自分の私欲のために神から与えられている一つ一つの賜物を無駄にしてしまうわけです。その人たちは、キリストの御座の裁きで取り返しのつかないことをしてしまったように、凄惨な後悔をします。号泣すると思います。

出エジプト記 32章に今私が言っていることがグラフィックに、絵画的に描かれております。モーセはシナイ山に登って神と顔と顔を合わせてあの10の言葉、十戒を頂きました。2枚の石板に、表にも裏にも神の10の言葉が刻まれたわけです。素晴らしい愛の言葉です。祝福の言葉です。それをモーセは山の麓で待っている民にもうすぐにもでも伝えたいと思って、意気揚々に下山してきたわけです。ところが、降りてくる最中、何か騒々しい声が聞こえてきます。民は自分たちの装飾品を、金の指輪だとか、鼻輪だとか、宝石貴金属類を皆集めて、そして金の仔牛を造って「この金の仔牛が私たちがエジプトから引き出した、連れ上ってくださった神である。」と。なぜそうってしまったのでしょうか。それはモーセがシナイ山で手間取っていた間、「いつになったらモーセは戻って来るのだろうか。」手間取るというのは、文字通り時間をかけるということです。「時間かかっているじゃないか。いつになったらモーセは戻ってくるのか。じれ

ったいな。」と。「もうモーセはもしかしたら山で死んじゃっているかもしれない。もう戻ってこないかもしれない。」麓の人たちはそこで金の仔牛を造って、そしてその金の仔牛を裸になって、裸踊りをして、飲み食いしながら、どんちゃん騒ぎをして、性的不道德の罪もそこに現しながら、お祭り騒ぎ、パーティー三昧を繰り広げていたわけです。「手間取っている。時間がかかっている。まだまだ戻ってくるまい。」そう思っている悪いしもべは、必ず仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めます。自堕落な生活をするようになります。

逆に、いつ戻って来られても良いように心備えをして、目を覚ましている人たちは、仲間を愛します。そしてこの世の肉的な活動から身を遠ざけて、敬虔な歩みを、自分を清くする歩みをするようになります。**ルカの福音書 12 章 32 節**を今度は開いて頂きたいと思います。そこもイエス・キリストが戻って来られるという教えがなされている箇所であります。『**32 小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。**³⁵ **腰に帯を締め、あかりをともしないさい。**(いつイエス・キリストが戻って来られても良いように、準備万端整えておきなさいと。)³⁶ **主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。**³⁷ **帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。』**特に **37 節**は私にとってかけがえのない聖句となっています。

もしかしたらこの中に「私は完全に悪いしもべです。」と、「イエス・キリストの来臨を全然待ち望んでいませんでした。携挙がいつ起こっても良いような生活は全くしていませんでした。目を覚ましているどころか、目を閉じていました。仲間を打ちたたくようなこともしてしまいました。酒飲みたちと、この世の人たちと人生を謳歌するように、全く世俗的なことに関わりあって、霊的な事柄をおろそかにしてきてしまいました。どうしましょう、イエス・キリストが戻って来たら。考えるだけで震えあがってしまいます。恐ろしいです。もう後悔することは分かっています。」

でも、**32 節**に『**小さな群れよ。恐れることはありません。**』と。恐れる事はありません。今からでも遅くはありません。**37 節**にもう一度目を留めて下さい。『**帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。**』目を覚ましていれば、それで幸いなんです。特別何かをしていなくても。「私は教会で何の奉仕もしていないんです。献金だって、そんなにしていないし。奉仕だって、そんなにしていないし。伝道だって、そんなにしていないし。何一つ私は他の人たちと比べれば何も出来ていません。」と。でも、ここでは『**目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。**』と。「目を覚まして、一生懸命働いている姿を見られる人たちは幸いです。」とは書いてありません。「目を覚まして、多額の献金をささげているところを見られるしもべは幸いです。」とは書いてありません。単に『**目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。**』と。言い換えれば、キリストの来臨を待ち望んでいる人たち、携挙を待ち望んでいる人たちは、それだけでもう幸いですと。

で、今皆さんはここに来てそれをしているんです。バイブル・スタディーに集って、イエス・キリストの携挙を待ち望んでいるわけです。今イエスはあなたのその姿を見ています。それだけであなたは幸いです。もしこの中に携挙を信じていない人がいるならば、その人は残念ですけれども、仲間を打ちたたいて、そして酒飲みたちと飲み食いして、どんちゃん騒ぎして、ただこの世で人生を満喫しているだけの者たちであります。その人は確実にかの日には、泣いて歯ざしりすることになります。

で、それ以外の人たちで「私は全然クリスチャンとしてはなっていなかった。全く不甲斐ないばかり。情けないばかり。クリスチャンとしては、もうだめクリスチャンです。でも、私はイエス・キリストが戻って来られることを今信じますと。もうそれが私の希望です。それこそが祝福されたのぞみです。それ以上、それ以外の望みは他にありません。イエスに会いたい。」いろいろ振り返れば「あの時ああしておけば

良かった、こうしておけば良かった。」と後悔はあるかもしれませんが、でも今は目を覚まして、もうただイエス・キリストが戻って来られのを待ち望むだけ。もうそれだけです。そういう人たちは幸いなんです。

創世記 50 章を見て頂くと、そのことがもっと良く分かります。この中に「私は決して敬虔な、熱心な、真面目な、良いクリスチャンではありませんでした。もう後悔ばかりで、イエスが今戻って来られるとしたら、もう震えあがってしまいます。恐ろしいです。怖くて怖くて仕方ありません。不安なんです。」という人には、この**創世記 50 章**のヨセフと兄弟たちの姿を見れば、慰めを受けます。希望を持てると思います。皆さんもご存じのように、ヨセフという人はイエス・キリストの雛形であります。このヨセフについて何か悪いことをした、罪を犯したという記録は少なくとも聖書の中には 1 つも記録されていません。このヨセフは兄弟たちに憎まれました。迫害されたんです。そして 17 歳の時に銀貨 20 枚で売られたんです。どこか似ているところはないでしょうか。イエス・キリストも兄弟たちから憎まれ、疎まれ、迫害され、そして銀貨 30 枚で売られました。年齢がイエスは 30 歳だったからです。ただヨセフが 30 歳の時、ヨセフは当時世界最強のエジプトのナンバー 2 になりました。総理大臣にまでなったんです。奴隷から囚人に。囚人から総理大臣に、パロに次ぐ者に引き上げられたわけです。イエスもおよそ 30 歳の時に公宣教、パブリック・ミニストリーを始められました。で、そういったヨセフとイエス・キリストの共通点というのは**枚挙の暇**がないんですけれども、その上でヨセフとイエスを重ね合わせながら。そしてヨセフの兄弟、彼らは悪い兄弟。言い換えれば、悪いしもべたちです。それと是非あなたを重ね合わせて見て欲しいと思います。

で、全部読むわけにはいかないの、**創世記 50 : 15**を見て下さい。『ヨセフの兄弟たちが、彼らの父（ヤコブ）が死んだのを見たとき、彼らは、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない。」と言った。』まあ、恐れてしまうのは仕方がないですね。彼らがヨセフに対して何をしてきたか、皆さんはよく知っていると思います。当然の恐れです。決して良い兄たちではなかったわけです。むしろヨセフには酷い仕打ちをしてきたわけです。恨まれても当然、憎まれても当然、殺されても当然ということをしてきたわけです。恐ろしい罪をヨセフに対して犯してきた兄弟たち。恐れるのは当然です。で、**16 節**に『¹⁶そこで彼らはことづけしてヨセフに言った。「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました。¹⁷『ヨセフにこう言いなさい。あなたの兄弟たちは実に、あなたに悪いことをしたが、どうか、あなたの兄弟たちのそむきと彼らの罪を赦してやりなさい、と。』今、どうか、あなたの父の神のしもべたちのそむきを赦してください。』ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた。¹⁸彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。「私たちはあなたの奴隷です。（しもべですと。）」でも、私たちは悪いしもべでしたと、正直に認めています。そんな彼らに対して **19 節**『ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。（先ほどルカ 12 章 32 節で『小さな群れよ。恐れることはありません。』とイエスが言った言葉を重ねて見て欲しいと思います。） どうして、私が神の代わりでしょうか。（ヨセフは確かに神の代理人ではありませんが、イエス・キリストは文字通り神の代理人。そしてイエス・キリストはパロに次ぐナンバー 2 どころか、王の王、主の主。全地の主であります。）」で、**20 節**に『²⁰あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。²¹ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。』「養いましょう。」とあります。これを先ほど読んだルカ 12 章 37 節と比較して読んで欲しいと思います。もう一度ルカ 12 : 37 を見ますと『帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め（イエス・キリストが帯を締め）、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。』凄いです、これは。信じられないような驚くべきことです。イエス・キリストが携挙の際には、しもべの姿をとって私たちに食卓に着かせてくれるんです。具体的には、**黙示録 19 章**の『子羊の婚宴』という披

露宴のところでは、『そばにいて給仕をしてくれる。』と。私たち花嫁に、花婿キリストが給仕をしてくれる。創世記 50 章のところでは、ヨセフが「養いましょう。私が給仕します。」と。21 節続き『こうして彼は（ヨセフは）彼らを（兄たちを、悪いしもべたちを）慰め、優しく語りかけた。』

ヨセフはエジプト人の、ユダヤ人ではない異邦人の妻を目とっております。全てヨセフはイエス・キリストの雛形として、イエスのなさることをまるで予告するかのようには、私たちにヨセフの姿を見せてくれているわけですがけれども。私たちも同じように、私たちの長兄、兄であるイエス・キリスト、兄弟に対して悪いことをしました。私たちもヨセフの兄たちのように、悪人であります。イエスに対して何をしたのか。私たちの罪がイエス・キリストを十字架に磔はりつけにしたんです。しかし『あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。』と。『それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。』と。イエス・キリストは必ず戻って来られます。私たちを間違いなく迎えに来て下さいます。でも、その際に是非覚えて欲しいことがあります。イエスはあなたをその時には絶対に責めません。叱りません。あなたはキリストの花嫁です。ですから、恐れてはなりません。出来の悪い、シミやシワ、傷だらけの花嫁でも、イエス・キリストはあなたのことを決して責めたり、非難したり、断罪する、糾弾するということは絶対にありません。むしろあなたが想像もしていなかったような驚くべき祝福を用意して下さい。あなたのためにディナーテーブルを用意して下さい。ヨセフの兄弟たちのように、人生において飢饉があったら、「食料がありません。食料があるのはエジプトだけです。」と。勿論そこには彼らが売り飛ばしたヨセフがいたんですが、ヨセフがまさかそのエジプトの総理大臣になっているとは知らずに、食料避難をして兄弟たちはヨセフを頼りに行ったわけです。同じように私たちも人生において飢饉があったならば、ヨセフよりも偉大なお方、王の王、主の主であるイエス・キリストを頼って行かなくてははいけません。ですから、私たちがどんなに悪いしもべでも、飢饉の時には、危機の時には、困った時には、必ずイエス・キリストを探して下さい。目を覚まして、キリストの来臨を待ち望んで下さい。そうすれば、あなたがかつてはキリストに対してはとんでもない酷い仕打ちをしてしまった者であったとしても、必ずイエス・キリストはあなたを優しく迎え入れてくれます。決してあなたを責めたり、あなたを罰する事はありません。私は、自分の生きているこの時代にイエス・キリストが必ず迎えに来られると心から信じています。確信しています。でも、もしそうならなかったらどうするんですかと。そんな事は一切心配していません。たとえ私が生きている間に、私が先に死んでしまっただけでその後携挙があったとしても、それでも私は何の後悔もありません。むしろ、パウロも自分の生きている間にイエス・キリストが迎えに来ると固く信じていました。ペテロという人もまた同じあります。丁度第二ペテロ 3 : 3~4 にペテロが主の来臨のことを語っております。『**まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、⁴次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」**』終わりの時代になると、「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。携挙がいつ起こるのか。そんなの馬鹿らしい。そんなの作り話だ。そんなの狂信的な人たちの信じる狂信的な教理である。」と。でも、まず第一に次のことを知って欲しいと思います。終わりの日には、あざける者たちがやって来ます。もし、携挙を信じているあなたをあざける人たちがやって来たら、喜んで欲しいと思います。あざけられたら、是非喜んで欲しいと思います。なぜならば、今は世の終わりであるということをお前は確信出来るからです。「よくぞ言ってくれた。これで分かった。これより一層私は確信できました。あなたはあざければあざけるほど世の終わりが今であることがよく分かります。」と。「イエス・キリストの来臨がますます近づいているということがよく分かります。」と。「もっとあざけって欲しい。そうすればキリストが早く戻って来られるから。」そういうことです。ペテロも本気で自分の生きている時代にキリストの来臨がある、携挙があるということを心底信じていました。ちなみに再臨という言葉もあ

りますが、それは地上再臨とも言います。携挙のことを空中再臨と言います。2つのイベントであります。先に携挙が起こり、そしてその後にはこれは丁度世の終わりの人類の最終戦争と呼ばれるハルマゲドンの戦いにイエス・キリストは戻って来られて、その時には地上のオリーブ山の上に降り立つんです。ですからそれを地上再臨と言います。携挙の時には再臨されるんですけども、地上には降り立たずに空中止まりです。雲の中に私たちクリスチャンを引き上げて、そこで私たちはキリストと会うんです。これは別個の、全く別々のイベントであります。いずれにしてもペテロは主の来臨、携挙が自分の生きている時代にあると。でも、そう彼らは確信しながらも実際のところ携挙は彼らの生きている時代には起こりませんでした。彼らは死んだんです。そして、天に召されたんです。でも、彼らはそのことを後悔しているのでしょうか。決してそんな事はないと思います。私も同じです。自分の生きている時代に携挙があることを固く信じています。でも、たとえそれが間違いでも私は後悔しません。むしろそうすることが、パウロのような、ペテロのような生き方を私に与えてくれると思うならば、こんなに嬉しい事はありません。キリストがきよくあられるように、自分もきよく生きることが出来るならば、こんなに嬉しい事はありません。携挙を待ち望むことによって、不敬虔とこの世の欲を捨てて、そして慎み深く、正しく、敬虔に生活出来るならば、それはかけがえのないことだと思います。むしろ私は、悪いしもべにはなりたくありません。仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりして、どんちゃん騒ぎする。そんな生き方はしたくないんです。ですから、携挙がいつ起こっても良いように、そのことを確信して待ち望んでいきたいと、ただただそう願うばかりであります。

で、テキストに戻って頂きまして 14 節。『¹⁴キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちがすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。¹⁵あなたは、これらのことを十分な権威をもって話し、勧め、また、責めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。』イエス・キリストが私たちを永遠の滅びから救い出して下さったのは、罪の罰から解放し、罪の力からも解放し、そして将来的には罪そのものからも、罪の存在からも解放して下さるのは、私たちがきよい歩みをするためです。特にここでは『**良いわざに熱心なご自分の民**』とあります。これがクリスチャンの定義です。クリスチャンとは『**良いわざに熱心な神の民**』です。良いわざに熱心じゃないクリスチャンは、本来は存在しないはずであります。“良いわざ”という言葉は、このテトスの手紙のキーワードとなっています。で、“ご自分の民”という言葉は、出エジプト記 19:5 にも見られる、神がイスラエルの民のことを「**宝の民**」と、特別なお宝であると言った言葉と同じであります。ですからクリスチャンとは『**良いわざに熱心な神の選びの民**』、**宝の民**なんです。そして『**ご自分のためにきよめるためでした。**』キリストの花嫁としてふさわしくなるように、しみもシワも傷もそのようなものが何ひとつないきよい栄光の花嫁とするために、私たちは救われたんです。ノンクリスチャンの生活をただただ続けるために救われたわけではありません。ただ死んだときには天国に行ける、それだけの生活をさせるために、天国に行くまでは何をしててもいい、どんな罪でも「ごめんなさい。」をすれば赦してもらえる。相も変わらずノンクリスチャンと変わらぬ生活を送り続ける。それが、イエス・キリストが十字架の上で掛かって死んで下さったことではないんです。むしろ、全く新しい歩みをするため。そのことは 3 章にも強調されているポイントであります。これについてあなたは十分な権威をもって話しなさい、勧めなさい、また、責めなさいと。誰にも軽んじられてはなりませんと。パウロは若い牧師のテトスにこのことを語っています。

エレミヤ 1:6~10 も参照して頂きたいと思います。『⁶そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」(エレミヤもテトスやテモテ同様若かったんです。恐らく 10 代後半から 20 代、若しくは 30 歳といったような年代です。まだ若者です。まだ若くて、どう語ったら良いのか分かりません。) ⁷すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあ

なたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。⁸彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。——主の御告げ。——」（あなたもあの人の顔を恐れていないでしょうか。この人の顔を恐れていないでしょうか。彼らの顔を恐れてはなりません。主があなたを遣わすんです。主があなたに命ずることは全て漏れなく語らなくてははいけません。こんな事を言ったら、あの顔が。あのしかめ面が。冷ややかな目で、忌み嫌うような目で私を見ます。蔑^{きげす}むんです。または、ブチ切れて逆ギレして。恐れてはなりません。）⁹そのとき、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。¹⁰見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。』」10節に読んだところが、クリスチャンのミニストリーと呼ばれるものをうまく描写しているところでもあります。クリスチャンのミニストリーとは（ミニストリーというのは神の働きのことですが）、それは引き抜いて引き倒す。滅ぼして壊す。でも同時にそれは建てて植えるものでもあります。

エレミヤ 1:17 を見て下さい。『さあ、あなたは腰に帯を締め、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く。』あなたが十分な権威を持って語らないと、勧めないと、また責めないと、あなたは軽んじられます。神があなたに命じたことを皆語らなければ、その語る相手の顔を見て恐れて怯えてしまっているならば、あなたは彼らの面前で打ち砕かれます。恥を見るということです。軽んじられる、とされています。しっかりと語らないと、ちゃんと語らないと、正直にオープンに語らないと、あなたは確実に彼らの面前で恥をかきます。相手の顔色を見て「こんなことを言ったら嫌われるんじゃないか。こんなことを言ったらしかめ面されるんじゃないか。無視されるんじゃないか。馬鹿にされるんじゃないか。良好な関係を失ってしまうんじゃないか。絶交されてしまうかもしれない。不利益が生じるかもしれない。あなたはちゃんと語っているでしょうか。あなたの夫に対して、妻に対して、親に対して、子供たちに対して。あなたが神の命じられたことを皆語らなければ、あなたは恥を見ます。なぜ子供たちはあなたを尊敬しないのでしょうか。リスペクトしないのでしょうか。それはあなたがちゃんと語っていないからです。子どもに嫌われたくないと思っているからです。親に嫌われたくないと思っているからです。周囲の人たちに、友人たちに嫌われたくないと思っているからです。それを恐れてしまうとあなたは結局は彼らからは何の尊敬も受けません。リスペクトされないんです。子供たちからも、妻たちからも、部下たちからも、上司たちからも、誰からもあなたはリスペクトされません。

詩篇 51:8 にこう書いてあります。『私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。』これは詩篇 23 篇の学びでもやりましたけれども、毎回毎回羊の群れから迷い出してしまう頑^{かたく}な羊。羊飼いの言うことを全く聞かない、そのような愚かな羊は、羊飼いがしっかりと迷い出ることがないように、（勝手に毒草を食べて病気になって死んでしまうかもしれない。また、どこか穴に落ちてしまうかもしれない。谷底に落ちてしまうかもしれない。または害獣に咬み殺されてしまうかもしれない。）だからそのような迷い癖のある羊を羊飼いは捕まえて、もう迷い出ることが出来ないように、その足を敢えて折るんです。「酷いことをするじゃないですか。」とあなたは思うかもしれませんが、その後羊飼いは歩けなくなった羊を肩に背負います。骨がしっかりと繋がるように処置をした上で、ずーっと 24 時間密着状態で背負い続けるんです。その間に、羊飼いのことが信用出来なかった、羊飼いの導きに素直に従えなかった、羊飼いの言うことを聞きなかった羊は、自分をずーっと背負って、大事にしてくれて、世話をして、一番これまででなかったことに近いところに自分を置いてくれている羊飼いとの間、深い絆を設けることが出来るようになります。これまでにないほど羊飼いと近い関係を持つことが出来るようになるわけです。それがここでも言われていることです。『そうすれば、あなたがお砕き

になった骨が、喜ぶことでしょう。』バシッと言うのは、またバキッと言うのは、それは愛しているが故であります。主があなたに痛い思いをさせるのは、あなたがまず第一に頑なであるということ。別に足を折られなくてもあなたは言うことを聞けるんですけれども、でも痛い思いをしなければ、ハードレッスンを通らなければあなたは言うことを聞きません。その場合あなたの足は折られます。でも、それはあなたをいじめるためではありません。罰するためじゃないんです。むしろ、あなたともっと近づきたい。もっとあなたを引き寄せたい。もっとあなたと信頼関係、愛の関係を結びたい。それが羊飼いのハートであります。愛しているからこそ、バシッと言うんです。ハッキリ言うんです。ストレートに語るんです。包み隠さず正直に語るんです。こんなことを言ったら相手にどう思われるか、そんな事はむしろ愛のないことあります。相手のことを思えば、言わなければ迷い出たまま、言わなければ穴に落ちてしまう、言わなければ谷底へ、言わなければ悪いものを食べて病気になるかもしれない。害獣に咬み殺されてしまうかもしれない。永遠に滅びて地獄に落ちしてしまうかもしれない。言わなければ神と永遠に引き離されてしまうかもしれない。だから言うんです。時にそれが相手を痛めつけることであったとしても。耳障りの良いことじゃなくても。耳痛いことでもです。

箴言 27:5~6 にこう書いてあります。『**あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。**⁶**憎む者がくちづけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。**』あからさまに責めるのは、敢えて傷つけるようなことを言うのは、こういうことなんです。愛しているからです。耳障りの良いこと、差し障りのないこと、遠回しな言い方で、または耳痛い事はうまくオブラートをかぶせて、または除去した形で、相手に喜ばれるような、相手に違和感を与えないような、相手にすんなり受け入れられて喜んでもらえるようなことを言おうとする。そこには愛がありません。むしろあなたは自分を愛しているんです。

「相手を傷つけないからこんな事は言えないんです。」それは嘘です。あなたは自分が傷つきたくないだけです。あなたは自分がその人との関係を失いたくないだけです。もし、それを言わなければその人は相も変わらず罪の中で生きるようになります。そして最後は罪の中で死にます。最後は地獄に落ちるんです。それでもなおあなたは、その人の顔を恐れて、怯えて、「こんなことを言ったら傷つけてしまうかもしれない。」本当はあなたが一番かわいいんです。あなたは嫌われたくない、ただそれだけのことです。相手を愛してなんかいないんです。「自分は傷つきたくないけれども、その代わり相手には地獄に行ってもらっても構わない。だから私はストレートには言わないんです。だから私はあからさまには攻めないんです。むしろひそかに口づけをして、もてなすんです。」愛のかけらもありません。そのことを是非覚えて欲しいと思います。

『¹⁵あなたは、これらのことを十分な権威をもって話し、勧め、また、責めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。』テトス 2:15 であります。

そしてテキストに戻って頂いて、3章をさらっと見たいと思います。続きであります。『¹あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。²また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。』これは特に3章1節以降、この世で社会生活を送る上での、クリスチャンの6つのガイドラインというものが出ております。6つというのは、1節に「服従する」ということ。2番目として「すべての良いわざを進んでする者」。3番目は2節の「だれをもそしらず」人をそしってはいけません。これは悪口を言う、否定的なことを言うことです。4番目は「争わず」、5番目は「柔和で」、6番目は「すべての人に優しい態度を示す者となる」。これがクリスチャンのこの世における生き方です。クリスチャンの社会生活において、6つガイドラインとして挙げられています。こうあるべきである。あなたはこの世にあって、この社会にあって、こういう者でなくてはならないという6つのポイントです。

で、是非参考にして頂きたいのは、ローマ 13 章。そこにもクリスチャンの社会生活についての規範が書いてあります。クリスチャンはこの世において、社会において、最高の模範的な市民とならなければならないということ。パウロは、すべての権威に従うように。その時代、クリスチャンたちを迫害する狂人皇帝ネロが最高権者だったわけです。そのネロは、神に立てられた者だから、そのネロにも従うようにと。勿論誤解がないようにして頂きたいのは、信仰に抵触することは、これは避けなくてははいけません。時に「人に従うよりも、神に従うべきです。」というところがあります。例えば「ネロを礼拝せよ。」と言われても、クリスチャンたちはそれが例え最高権者の命令でも、神以外は拝みませんのでそれは致しません。でも、それ以外のことならば、例え憎きクリスチャンたちを人間と思わないようなあの迫害者の命令でも、ネロの言う事でも聞かなくてははいけません。そのことがローマ 13 章に、パウロの口によって語られています。で、実際にパウロはこのネロによって首をはねられて殉教しているんです。それでもなおパウロは、すべての権威は神から与えられているものだから、神に従うように従うようにと。

で、同じようにペテロも**第一ペテロ 2 : 13~17**で、社会の秩序に対して従うように。上に立つ者たちのためにとりなすように、祈るようにと。

ですから、パウロも同じことをテトスに対して言っているんです。クリスチャンは必ず模範的な市民にならなければいけないと。『**支配者たちと権威者たちに服従して**』。この“服従”というのは、特に法律に対して遵守するという意味です。何でも言いなりになるという意味ではありません。誤解しないで下さい。ですから、例えば上に立つ者が法律に違反するようなことをあなたに命じるならば、上司があなたに命じるならば、それに従ってはいけません。うまく税金を誤魔化してとか、法の抜け道を探り求めて犯罪行為をしながらうまく利便性を図ったり、会社の利益なりそういうことをあなたが命じられたとしても、周りがそれを皆是認していたとしても、それが慣例だったとしても、そうしたものにクリスチャンは従ってはいけません。あくまでクリスチャンは法に対して遵守する者でなければいけません。

で、『**従順で**』。これは態度の問題です。法律にただ従っていれば良いだけではありません。心の底から従順な態度を示さなければいけません。

で、『**すべての良いわざ**』これもキーワードだと言いました。『**良いわざ**』テトス 2 : 14 にも使われています。良い働きということです。良い行いということです。その『**良いわざを進んでする者とならせなさい**。』言われなければやらないんじゃないで、進んでなす。自発的にということです。

で、2 節に『**だれをもそしらず**』。これは特にクレテという所の島の人たちに語っていますが、「クレテ人は昔からの嘘つき、悪いけどもの、怠け者の食いしん坊」を言われていて、パウロは「それは嘘じゃない。それは本当のことだ。」と言っているわけですがけれども、にもかかわらず「そしってはいけない。」と言っているわけです。

『**争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい**。』と。テトスは、クレテの住民たちを相手に伝道したり牧会するのはとても大変であると。行き詰まって苦労していたわけです。そんなテトスに対してパウロは、クレテ人とは厄介な人たちであると。扱いにくい人たちなんだと。もうすっかり自分が牧会しているその対象が、クレテ人たちに本当に手を焼いて失望して、何の前進もない、もう後退ばかり、何の手応えも感じない。そんな彼らに、クレテ人とはこういう者たち。で、クレテ人は特殊な人たちではありません。私たちの周りにもいます。この教会にもおられます。この町にもおられます。あなたの家族の中にも、職場にもおられます。昔からの嘘つき、悪いけどもの、怠け者の食いしん坊。でも、私たちがキリストを知る前は、そういう者だったということを忘れてはいけません。だからそしってはいけません。

3 節を見て下さい。『**私たちが以前は（このクレテ人といっしょです。）、愚かな者であり、不従順で、迷**

った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。』私たちはつついクリスチャンになってから、ノンクリスチャンのことを見下したり、汚らわしく思ってしまう。「彼らは何も分かっていない。罪汚れた者たち。地獄行きが相当である。」と。ところが私たちもかつては、そういう者だったんです。それを忘れてはいけません。どういうところから私たちは救われてきたのか。それを知れば、あなたはいちいち持ってそのノンクリスチャンの友だちや、又は家族に対して不快に思う事はありません。怒ることもないです。「こんなに一生懸命尽くしているのに。こんなに分かりやすく福音を伝えているのに。なぜこの人たちはこんなに頑^{かたく}に拒んで、そして私のことをこんなにも嫌うのか。なんていう人たちだ、酷すぎる。こんな仕打ち。」がっかりしたり、怒ったり、相手を疎ましく思ったり。私たちはそういうリアクションをしてしまいますけれども、でも実際にそういう人たちの反応を見て「あっ、私もかつてはそうだった。彼らと何ら変わらない。」なのに私たちは目くじらを立てて、ノンクリスチャンのそのネガティブな反応に、無反応に対して怒るわけです。がっかりするわけです。傷つくわけです。でも、それは当たり前なんです。ですからいちいち振り回されないで下さい。いちいちショックを受けないで下さい。むしろその際に思い出して下さい。「私も彼らと全く同じだった。こんなに頑^{かたく}なだったのに、こんなに不敬度だったのに、こんなに靈的な事柄に無関心だったのに、私は救われた。これは神の恵みである。」と。その場で即、神に感謝を捧げ、賛美を捧げて下さい。彼らのことを憎んだり、怒ったり、見下げたり、「もう二度と伝えてやらない。」とか、「二度と親切にしてやらない。」なんて思わないで、その場で神を誉め讃えて下さい。「主よ、感謝します。私も彼らと全く同じでした。私もここから救われたんです。」と。「このような者でした。愚かな者でした。不従順な者でした。迷っていた者でした。いろいろな欲情と快樂の奴隷となっていた者でした。悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。この私が救われたんです。感謝します。」と。

そして4節。「しかし」という言葉が目にとまります。『⁴しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき（救い主のいつくしみとは、これは「親切、行為」という言葉であります。で、人への愛。これは全ての人を愛するという愛。ギリシャ語では「フィナンスロピア」"philanthropia"と言って、「博愛」というふうにも訳せます。イエス・キリストを信じる者だけが愛されるのではありません。イエス・キリストを信じない者たち、「イエスなど知らない。信じたくない。キリスト教なんか嫌いだ。イエスなんか神じゃない。唯一の救い主なんて絶対に信じない。」そういう人たちにもこの愛は注がれているんです。）、⁵神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、**新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**』もう一度5節の方に目を戻して頂きたいと思いますが、私たちは自分の義のわざ、正しい働き、行いによって、慈善活動なりチャリティー活動によって、社会奉仕によって、そうした善行によって私たちは救われたのではありません。むしろ、**イザヤ 64 : 6**には、人の行いは汚れた着物のようであると。「汚れた着物」それは直訳すると「月のもので汚れたもの」。すなわち、女性の月経によるナプキンなりタンポンといったものと、露骨に表現しているところでもあります。直訳は「月のもので汚れたもの」です。それが人の良いわざというものです。私たちが自力で我力で行う善行というものです。どんなに徳を積んだとしても、どんな善行を積んだとしても、神の目にはそれらは忌み嫌うべき汚物なんです。むしろ、私たちは救われ難い者であったのに、神の憐れみによって、「憐れみ」というのは本来受けるべきものを受けないんです。本来受けるべきもの、私たち罪人にとっては罰です。永遠の滅びです。地獄行きです。それを受けずに済んだんです。^{まぬが}免れたんです。

そして『**聖霊による、新生と更新との洗いをもって**』とありますが、これはいろんな解釈のしようがあるんですけども、中にはこの「**新生と更新との洗い**」という部分、これは水のバプテスマではないかと。水のバプテスマを受けることで救われるというふう捉える人もありますけれども、原文ではむしろ「**新**

生の洗い」という言葉と「聖霊による更新」という言葉に分けられるわけです。「新生」というのは新しく生まれるわけですから、これは勿論救われるということです。救われることによって、特にこの「洗い」というのは、洗礼というよりも、むしろエペソ 5:26 で使われているような『みことばによる、水の洗い』という部分です。私たちはみことばによって、神の種が植え付けられて、新しく生まれたわけです。きよい命が植え付けられたんです。それが「新生の洗い」という部分です。又はイエス・キリストがあのコデモに対して語ったヨハネ 3 章の『人は新しく生まれなければならない。上から生まれなければならない。』そこにも“水”という言葉が使われておりますけれども、いずれにしても「新生の洗い」という部分と、もう一つは「聖霊による更新」です。これは、新しいきよい命を頂いたら、きよい御霊による新しい人生がスタートするということです。まずは新しく生まれなければ、きよい人生は送れないわけです。まず先に「新生の洗い」を経験します。きよい命を頂きます。その後に「聖霊による更新」すなわち御霊に満たされたきよい人生、これが新しい人生です。今までの人生とは全然違うんです。ノンクリスチャンの人生をそのまま続けるんじゃないんです。それは汚れた人生ですから、それはもうおさらばします。それまではきよい人生を歩みたくても歩めなかったわけです。なぜならば、きよい命がなかったからです。新しく生まれ変わっていなければ、きよい人生を送ることはできません。心がきよくなければ神を見ることは出来ないんです。ですから、まず「新生の洗い」を経験し、きよい命を頂き、そしてその次の段階として「聖霊による更新」きよい人生、新しい歩みをするようになります。同じコンセプトが第一コリント 6:11 に書かれております。『あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。（「以前はそのような者」というのは、9~10 節に書いてあります。以前は、不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者（同性愛者ということです。）、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者。で、彼らは皆、神の国を相続出来ない。地獄行きが相当だったと。以前はそういう者でした。）しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。』と。ちょうどテトス 3:5 と同じようなことが書かれております。

で、またテキストに戻って頂いてテトス 3:6 に『⁶神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって（ここに三位一体の神がすべて出揃っています。“神”は父なる神。“聖霊”は勿論聖霊なる神で、“救い主なるイエス・キリスト”は子なる神です。三位一体の神が皆ここに登場しています。）、私たちに豊かに注いでくださったのです。』特にここでは聖霊が豊かに惜しげなく私たちに注がれる。もう罪を犯さなくてもいい歩みをする事が出来るように。罪を犯したことの無いイエス・キリストと全く同じ歩みを行う事が出来るように。そして、イエスが聖霊で満たされて神の驚くべき御業をなしたように、私たちがイエスと全く同じ働きをなしていく。奇跡をなしていく。神の教えを説くような。そのために神は私たちに聖霊を豊かに惜しげなく注いで下さいます。

『⁷それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。』先ほどは 5 節で「憐れみ」が言われていましたが、この 7 節では「恵み」とあります。「恵み」は当然受けるべきでないものを受けます。「憐れみ」は当然受けるべきものを受けません。違いがあります。「憐れみ」は当然受けるべきもの。罪人として受けるべきものは、刑罰、永遠の滅び、地獄です。でも「恵み」は当然受けるべきでないものを受けます。罪人として当然受けるべきでないものとは、永遠の命、天国、神の子どもとしての身分、キリストの花嫁となる事。これは受けるべきものではありません。「憐れみ」はとりあえず赦免してくれるんです。「罰しないよ。」と。ところが、「恵み」は更に 1 歩進んで、自分のひとり子を殺した殺人犯を、私の子供として、養子として家族に迎え入れます。イエス・キリストを手にかけて殺人犯の私たちに、父なる神は我が子として養子縁組して下さい。これが「恵み」

です。憐れみと恵みによって私たちは救われたんです。そして「**義と認められる**」というのは、これは法律用語で「もうこれまで一切罪を犯したことの無い者とみなされる」神はいつまでもあなたの罪を覚えていません。神の赦しは、忘れるということです。もうあなたには犯罪歴はないんです。まっさらです。クリーンです。これまで1度も罪を犯したことの無い者とみなされるんです。ただ恩赦されたとは意味が違います。恩赦というのは、ただ単に時の権力者によって、時の権力者がどんなに寛大で寛容なのかを示すために、憐れみ深いものであるかを示すために行うものですが、恩赦ではなくて完全なる犯罪歴を消去するという、無実であるということです。無罪であるということ、それを宣言することが「**義認**」という言葉です。永遠の命の望み、希望が与えられています。神の相続人となれます。キリストのものは全てあなたのものです。キリストのものとは、すべてです。全宇宙です。「これがない。あれがない。これが必要です。もう銀行口座にはこれしかないんです。」心配しないで下さい。あなたは神の子どもとされて、キリストの花嫁とされたわけですから、父なる神様からも相続財産を受けますし、またキリストの花嫁ですから夫婦で等しく相続出来るわけです。キリストのものはあなたのものでもあるんです。素晴らしい身分、特権が与えられています。

8 節に『これは信頼できることばですから、私は、あなたがこれらのことについて、確信をもって話すように願っています。(これは信じるに値する言葉です。ですから皆さんも確信を持って強調して今ここで聞いていることを、ここに書かれていることを、周囲に対して話して欲しいと思います。信頼できる言葉です。これは神の言葉です。天地が滅び失せても、変わらない言葉であります。確信を持って、自信なさげにではなくて、半信半疑ではなくて、確信を持って。相手の顔色を見ながらではなくて、確信を持って語って欲しいと思います。) **それは、神を信じている人々が** (勿論これはクリスチャンのことですが)、**良いわざに励むことを心がけるようになるためです。これらのことは良いことであって、人々に有益なことです。』** 良いわざ、良い働き、良い行いと 8 節にある言葉、これもキーワードです。何度も出てきております。これは勿論すべては神の憐れみを受けて、恵みを受けて、救いを受けた者の応答としての良いわざです。この良いわざは、私たちの自力、我力、肉の力によって救いを獲得するための良いわざではありません。これを勘違いしてはいけません。私たちは自分の義のわざによって、律法を守り行うことによって自分の救いを獲得したわけではありません。あくまでその良いわざ、義のわざというのは、義人のイエス・キリストが十字架の上で成して下さった良いわざによって、私たちは救われたんです。キリストの功績によって私たちは救われたわけですが、でも、救われて私たちは、今度はその救いに感謝して、その救いに対して、その愛に対して是非応えたいと自発的に行動するようになります。それがここに描かれている良いわざです。神の救いに対する応答です。よく皆さんに英語で説明しますが、良いわざ、良い働き、奉仕というのは、「レスポンシビリティ」"responsibility"ではなくて「レスポンス」"respons"だと。「レスポンシビリティ」というのは「責任」です。「レスポンス」これは「応答」をいう意味です。「クリスチャンだからやらなきゃいけない。教会に行かなきゃいけない。奉仕をしなければいけない、当番だから。献金しなければいけない。」ではなくて、「あまりの救いの素晴らしさに、あまりに驚くべき恵みであるが故に、私はもうこの感謝をどう表したら良いか分からない。すべてを捧げます。この私を使って下さい。あなたに受け入れられる、生きたきよい供え物としてこの私を如何様にも使って下さい。私の持てるもの全ては、あなたのものです。あなたの栄光のために使って下さい。喜んで差し出します。」良いわざがそこから自発的に生まれてくるわけです。

で、9 節に“しかし”とあります。これは勿論対比となっています。『⁹しかし、愚かな議論、系図、口論、律法についての論争などを避けなさい。それらは無益で、むだなものです。¹⁰分派を起こす者は、一、

二度戒めてから、除名しなさい。¹¹ このような人は、あなたも知っているとおりに、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。』対照的に所謂クレテの教会の偽教師たちは、愚かな議論、系図（この系図というのは特にユダヤ人たちがこだわったことです。〇〇の由緒正しい家系である。どの部族に属しているか。そのようなことで彼らは自分たちが霊的であるだとか、ハイクラス、レベルが高いだとか、身分が高いだとか。そんなことを常に議論していたわけです。それは今日のキリスト教系の異端のモルモン教にも見られます。モルモン教徒も系図を重んじます。）それらは全く“無益”だと。8節の終わりの“有益”と対照的です。全部無益、無駄なものであると。偽教師の特徴として、彼らは非常に愚かな議論、そして聖書に書かれていないようなものを重要視します。系図だとか。そして、口論。言い争うということです。律法についての論争。それらを避けなさい。「避ける」というのは、完全に無視して、彼らとは違う方向に進みなさいということです。「いちいち付き合っはいけない。相手にしてはいけない。」と。

同じ言葉が第一テモテ 1:4 に使われています。『果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。』だから避けるんです。同じことが繰り返されており。

で、さらに具体的に「避ける」ということは、テトス 3:10 を見て頂くと『¹⁰分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。』と。「除名」というのは、完全にもうその人たちとは一切付き合っはいけない。教会の出入りもさせないということです。このような人は、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているからです。彼らは有害な存在として教会を引き裂く働きをします。「分派を起こす」というのは、分裂を起こすということです。これはサタンの働きです。

で、12節から終わりまで見たいと思います。『¹²私アルテマスかテキコをあなたのもとに送ったら、あなたは、何としてでも、ニコポリにいる私のところに来てください。』パウロは今ギリシャの町ニコポリからこの手紙を書いています。ニコポリというのは、丁度コリントの町の北西の 160 km ほど離れたところにある町です。このニコポリに居るパウロのところ、アルテマスかテキコ。アルテマスについてはここ以外には出ていませんから詳しく知ることは出来ません。ただ伝承によればパウロがかつて石打ちに遭って殺されたあのルステラという町の監督になったと、教会のリーダーになったということが伝承に残っております。で、テキコについては他の箇所にも見られます。エペソ 6:21。そこによればテキコはアジャヤ人である。アジャヤ人というのは今日のアジアではなくて、所謂トルコ辺りのことを小アジアと言うんですけども、そのアジャヤの出身であると。勿論ユダヤ人ではないということです。で、このテキコはパウロの同労者としてエペソ人への手紙とコロサイ人への手紙を届けるという大役も果たしております。ですから、アルテマスとテキコはどちらか迷う方ですから、両者ともそれほどパウロにとっては信用のおける片腕のような同労者たちだったということが分かります。他にもコロサイ 4:7 で、テキコは『主にあつて愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべ』とテキコのことを呼んでおります。若い牧者のことをパウロは、老練な牧師は、大変高く評価して、尊敬しております。自分より若い者たちを、こんなにも尊敬しているんです。同じ主にある兄弟、姉妹であると。上下関係はないんです。主にあつて愛する兄弟。自分の手下なんて思っていません。自分の小間使いなんて思っていません。忠実な奉仕者、同労のしもべであると。パウロも自分のことをしもべだという認識を持っていたわけです。しもべ同士。上下もないわけです。

で、『ニコポリにいる私のところに来てください。私はそこで冬を過ごすことに決めています。¹³ぜひとも、律法学者（または、これは法律家とも訳せます。ユダヤの律法であれば律法学者ですが、ローマの法律であれば、この人は弁護士ということです。法律家）ゼナスとアポロとが旅に出られるようにし、彼らが不自由しないように世話をしなさい。』この律法学者ゼナス、若しくは法律家のゼナスについても、ここ以外には知る由がありません。他に出てきていません。ギリシャ名ですのでユダヤ人ではないかもし

れません。そうするとローマの法律を専門とする法律家という話になりますが、ユダヤ人でもギリシャ名を使う場合がありますので、それは断定はできません。で、アポロについては、これはよく皆さんも知っていると思います。パウロのやはり同労者のひとりで、聖書に精通していた人物として雄弁家としても描かれています。**使徒 18:24**に出ています。またコリントの教会のリーダーとしても活躍しています。コリントの教会、**コリント人への手紙**の中にアポロの名前が何度も出てきております。皆パウロの有能な同労者たち。仲間たちです。

その律法学者、若しくは法律家の『ゼナスとアポロとが旅に出られるようにし、彼らが不自由しないように世話をしてあげなさい。』と。経済的な援助をするように、サポートするようにと。

で、14節で『私たち一同も、なくてならないもののために、正しい仕事に励むように教えられなければなりません。それは、実を結ばない者にならないためです。』“なくてならないもの”という部分は、口語訳聖書では「差し迫った必要に備えて」となっています。そちらの方が直訳に近いものがあります。「差し迫った必要に備えて」。“正しい仕事”というの実は、「良いわざに励む」という8節のところと全く同じ原語が使われています。どうして日本語は同じ原語が使われているのに言い換えてしまっているのか、その辺の趣旨は良く分かりませんが、本来はギリシャ語では同じ言葉です。8節の「良いわざに励む」という部分と「正しい仕事に励む」、言い換える必要もないところです。どちらも同じ言葉ですから、訳語を統一すべきだと思いますけれども、いずれにしても「良いわざ」も「正しい仕事」も同じことではありません。それに励むように教えられなければならない。教える必要があります。それは、実を結ばない者にならないため。クリスチャンでも実を結ばない不毛な信仰生活を送っている人たちが、少なからずともいるからです。クリスチャンなら皆実を結んだ歩みをしている、信仰生活を送っているかといったら、そうではないんです。クリスチャンなのに全然実を結んでいない。逆に悪い実を結んでしまっているなんていうケースもあります。ですから、常に良いわざ、又は正しい仕事、良い働き、良い行い、それに励んで神の栄光を現すために、神の働き人のためにも、差し迫った必要に備えて、常に準備をして、常に仕える事が出来るように。常に自分を差し出すことが出来るように。それはイエス・キリストがいつ戻って来てもおかしくないからです。その時には、あなたは評価されます。実を結んだ者かどうか、報いを算定されるわけです。

15節『私といっしょにいる者たち一同が、あなたによろしくとっています。私たちの信仰の友である人々に、よろしく言ってください。』この「信仰の友である人々に、よろしく言ってください。」というところは、直訳すると「信仰で私たちが愛している人々によろしくと言って欲しい。」信仰で私たちが愛する。おもしろい表現です。肉においては愛さない。「どうもこの人は生理的に受け付けません。」とか、「性格が合わない。反りが合わない。ウマが合わない。全然自分とは何の接点もない。どう話したらいいかも分からない。どう接したらいいかも分からない。」でも、信仰で愛するということが出来ます。この人もイエス・キリストに愛されている子供です。あなたの兄弟、姉妹、永遠を共に過ごす相手です。ですから、信仰で愛するんです。今日からあなたの夫も信仰で愛してあげてください。肉では愛せない、愛しづらくても、愛しにくくても、信仰で愛することが出来る。素晴らしい働きです。それも正しい仕事です。それも良いわざです。子供たち、周囲の人たちも、皆そうです。

で、『恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。』これがパウロのお決まりの締め挨拶であります。すべては恵みです。2章でも「神の恵みが現われて」恵みが素晴らしいことを教えてくれております。私たちは恵みによって救われ、恵みによって生きるんです。終始一貫、恵みです。恵みから離れてはいけません。恵みによって救われたのに、いつの間にか自分の行いによって信仰生活を維持しようとしていたり、何か自分が敬虔なクリスチャンであることを自分の行いによって証明しようとしていたり、又は自分の

行いがなっていないことにガッカリし滅入ってしまって「私なんかダメなんだ。セカンドクラスのダメクリスチャンなんだ。何も出来ないんです。」と、良いわざを全くしない、全く実を結ばない。そういう者にならないで、すべては恵みです。ダメな人にこそ、恵みが注がれるんです。自分はダメクリスチャンと烙印を押している人に、恵みは豊かに注がれます。「自分はそれなりのクリスチャン。まあまあよくやっている。あの人と比べれば私の方がマシです。」のように思っている人たちは、まったく恵みが分かっていない人たちであり、恵みからすっかり離れてしまっている人たち。恵みの下ではなくて、律法の下に留まってしまっている人たちです。その人たちは実を結ぶことは絶対にありません。ですから、是非「今も私は神の恵みによって生かされている。この恵みがなければ私は生きていくことすらないんだ。」と。何も出来ないんです。それが、パウロがやはり最後に強調したかったことです。

若い牧師のテトスに対して「あなたは今ガッカリしているかもしれない。何の手応えも感じていないかもしれない。あなたは伝道しているその対象は、あなたが牧会しているその対象は、その教会員は、その町の人々は、あなたの周囲の人たちは、皆クレテ人でどうにもならない人たち。昔からの嘘つき、悪いけどもの、怠け者の食いしん坊だ。」テトスは一生懸命頑張ったんです。出来る限りのことをしたんです。でも、彼らには何の効果ももたらさない。誰も救われない。だれもついて来てくれない。「ダメなのかな。もう牧師として相応しくないのかな。クリスチャンの働き人としてもうこれ以上良い働きを続けることは出来ない。」完全に行き詰まっていたんです。でも、パウロは「あなたの働きではない。あなたの功績ではない。あなたの頑張りではない。あなたの人格でもなんでもなし。すべては神の恵みなんだ。」と。「だからがっかりしないで、もう一度神の恵みに戻って、そしてますます良いわざに励むように。あなたも以前はこうだったじゃないか。」パウロがテトスを救いに導いたことを先週お話ししました。信仰によって生み出した我が子だと、パウロはテトスのことを呼んでいます。テトスがどういうところから救われてきたのか。彼はギリシャ人です。本来はイスラエルの民ではないですから、異邦人として神の家族に受け入れられる者としては全く相応しくない者だったわけです。でも、神の憐れみ、恵みによって、テトスも救われ、そして驚くことに神の教会を牧するという非常に重要な働きを担うことが許されていたわけです。すべては、それも恵みだったはずなんです。でも、いつの間にか神の恵みを忘れて、いつの間にか自分がどういうところから救われてきたのか。自分の身分も忘れて、そして不平不満を言ったり、落ち込んだり、ガッカリしたり、怒り散らしたり、「なんという連中だ。もうこんな所には居られない。もう次の任地へ行きたいです。もうこんな長野に居られません。こんな信州人、相手に出来ません。この舅、この姑、この人たちはねじ曲がっている。この人たちの先祖がおかしいから、だからこんな地域に暮らしていたから、こんな教育を受けたから。」いろいろと私たちはテトスと同じようにガッカリして、行き詰まって、神の恵みをすっかり忘れてしまう者であります。もう一度神の恵みに立ち返って、そして良いわざにますます励んで欲しいと思います。良いわざ、良い働き、正しい仕事、これが**テトス 2 章、3 章**のキーワードでもありました。もっともっと実を結ぶことが出来ます。そしてそれは必ず報いとしてあなたに返ってきますから、期待をして欲しいと思います。祝福された望み、それは私たちの主イエス・キリストが、花婿がお戻りになるその携挙です。その日まで、最後の最後まで、又それが自分の生きていく間に起こらなくても、死に至るまでも忠実に最後まで良いわざに励んで頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。